

## 「省察的实践者」に関する方法論的考察

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 重野 豊隆   |
| 雑誌名 | 星薬科大学一般教育論集   |
| 号   | 32  |
| ページ | 13-31   |
| 発行年 | 2014  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1240/00000371/">http://id.nii.ac.jp/1240/00000371/</a> |

# 「省察的実践者」に関する方法論的考察

重野豊隆

## Methodological Reflections on “The Reflective Practitioner”

SHIGENO Toyotaka

### はじめに

専門職のあるべき姿、専門職養成の理念（モデル）としてここ数十年日本でも注目を浴びているものに、ドナルド・Ａ・ショーン（Donald A. Schon）が1983年出版の同名の書物で提唱した「省察的実践者（The Reflective Practitioner）」の理念がある。（なお、“The Reflective Practitioner”の他の訳語としては、「省察的実践家」や「反省的実践家」がある。）ショーンにとっての真の専門職とは、既存の科学と技術を適用して或る問題に一定の解答を与えられる者ではなく、複雑に入り組んだ現実の状況の中でみずからの実践を通して問いを再設定し探究を進めて行く「省察的実践者」のことである。

本稿では、「省察的実践者」の試みの意義を主に哲学方法論の観点から、次の順序で概略的に考察していく。

第1章では、医療職教育における「省察的実践者」としての教育者の位置づけについて、予備的に考察する。

第2章では、ショーンの「省察的実践者」を方法論的に支える「行為の中の省察（reflection in action）」のあり方と対照されている「技術的合理性（technical rationality）」の特徴とその実施で主要な役割を演じる「標準化（standardized）」

の「適応 (application)」について考察する。

第3章では、「技術的合理性」の認識論の方法論的限界について考察する。

第4章では、「技術的合理性」の方法論的前提をなしている「実証主義 (Positivism)」の方法論的特徴について考察する。

第5章では、「省察的实践者」の認識論を方法論的に支えている「行為の中での省察」過程全体を方法論的に考察する。

結語として、「省察的实践者」を巡って今後の課題について触れる。なお、この課題の一部については、本稿の関連箇所ですべて注としてあらかじめ言及しておく。

(なお、引用等の著者・書名・頁の参照様式記号については、本稿の最後に記載した、「主な参考文献 (引用したり直接言及した著作・論文のみ)」の冒頭を参照のこと。)

## 第1章 医療職教育における「省察的实践者」としての教育者

ショーンが提唱した「省察的实践者」は、決して医療専門職に特化されているものではないが、たとえば医学部教育・医師養成に関して、教育学研究者の山口恒夫氏が、「医師の臨床教育制度の改革と医学教育全体の構造転換」を「現代社会における専門職養成と専門職の役割の大きな地殻変動の一事象であり、現代は、専門職に対する根本的な問い直しが求められている時代といってもよい」と述べているように、一般に医療系専門職を養成する大学にとって議論すべき必須課題のひとつである。(山口, 162)

また、薬剤師教育が6年制に移行してから今年度で9年目を迎え、新コア・カリキュラムによる新たな教育が次年度1年次より6年間かけて順次導入される薬学部教育においても、専門職としてのあるべき薬剤師像という理念についての継続した議論の際に取り上げるべき必須課題のひとつであろう。

医療専門職を養成する教育者からみて、医療と教育との間には密接な関連が成り立つ面がある。山口は、医療と教育との類似した関係について、およそ次

のような興味深い指摘をしている。

一方は「病いという経験」、他方は「学び」という作用の場の違いはあれ、ともに人間が変容することを支援する営みである。そのような人間の変容に、医療者も教育者も直接手を下すことはできない。「病い」から回復するのは、あくまでも「病者」であり、新しい事象を学ぶという形で自ら変容するのは「学習者」だからである。医療も教師も決して「変容」の主体にはなれないという一種の「もどかしさ」が随伴している。(山口, 162)

山口の指摘に対して、確かにこの変容の主体を担うのはあくまでも「病者」であり「学習者」であり、医療者なり教育者が主たる能動的主体になるべきではないにせよ、この「変容」を随伴的にいわば間接的に促しそれを支える(別種の)能動的主体たりうることは十分に可能である<sup>(1)</sup>。

また、医学部教育・医師養成に関して臨床倫理学の立場から永年教育実践を積み重ねてきた服部健二氏が、臨床倫理学という教育現場での教師の役割を「省察的实践者(反省的实践家)」と結び付けて、次のような示唆的な指摘をしている。

教育の様式には「模倣の様式(mimetic mode)」と「変容の様式(transformative mode)」という二つの見方がある。古代から今日にいたるまで、前者の模倣の様式で教育されてきたのが医学であって、その知に関しても技術や態度の面でもそうであった。これに対して、後者の変容の様式にふさわしいのは、現代の医療現場での医療問題に対応できる資質を備えた専門職を要請するための臨床倫理学や医療倫理学の教育である。それは対話中心の実践的なケース・スタディによって行われ、学習者の思考力、感性、創造性を刺激し変化させることを狙っている。(服部, 65)

臨床倫理学は、多様な背景や生活史を持つ者同士が同じひとつのケースを異なった視点から読み込み、意見交換することによって、自分の理解力の不足や死角に気づき、すなわち相互的な変容可能性を前提とし、蓋然的な

問題解決に協同でにじり寄ろうとする営みである。」(服部, 68)

こうした対話中心の実践的なケース・スタディの授業において、教育者が必要な技芸とは、「対話しようと試みる学生の気持ちを挫けさせないこと」、「言葉足らずだったり、発言の途中でまとまらなくなってしまう発言の意を汲み取って、その中に潜む問いの力を開花させること」である。「教育者に求められるのは、答えを持っていることでも知識を持っていることでもない。こうした技芸をもっていることである。」(服部, 81-82)

服部によれば、この種の変容様式が求められる教育現場での「省察的实践者(反省的实践家)」に向いているのは、いわば相手が取りやすい球を心がけて投げる外野手や難解なテキストを相手の理解力に応じた表現で言い換えられる翻訳者としての力量を、(あえて他の分野と比較すれば幾分か) 備えているとみなされる「人文・社会科学系の研究者」<sup>(2)</sup> である。

## 註

- 1) 患者-医療者関係、学習者-教育者関係の一方の担い手として、医療者や教育者が抱くこの「もどかしさ」の経験がいかにして生じるのか、この意義深い論点をショーンの「省察的实践者」の認識論に沿って方法論的に明らかにすることは、今後の課題のひとつである。
- 2) 服部は、「人文・社会科学系の研究者」の特徴を臨床倫理学という教育現場での「反省的实践家」としての役目と結びつけて、次のように言及している。「いわゆる言いがたいことを論じようという苦闘の結果である、数々の晦渋で迂遠な文を読みこなしてきた人文・社会科学系の研究者には、外野手ないし翻訳者としての力量が人一倍身につけているはずである。その上で、職業病的な不確実性に耐えながら、(専門知を合理的に適用しようとする技術的熟達者 technical expert とは対照的に) 地面に足をつけて汗する反省的实践家であろうとすることが、教育者のつとめだと考えている」(服部, 82)。

## 第2章 「技術的合理性」と「標準化」の「適用」

ショーンが提唱する「省察的实践家」を方法論的に支える「行為の中の省察」と対照された「技術的合理性」の認識論に沿って、その認識論を形成する際に用いている方法を哲学的方法論の観点からみれば、次の特徴が挙げられる。(Schon, 21-37/21-30)

「技術的合理性」の認識論の方法論的特徴は、「標準化」の「適用」をその認識論の主要な方法としているという点にある。

ショーンが言及している専門職の体系的基礎として、「専門分化していること、境界が固定していること、科学的であること、そして標準化していること」(Schon, 23/23-24)、この四つの本質的特性が挙げられる。この最後の「標準化していること (standardized)」がとりわけ重要である。なぜなら、「技術的合理性」のモデルでは、専門職の知識の基礎とその実践との関係が「標準化されていること」でかわりを持つからである。

「技術的熟達者 (technical expert)」としての専門家が直面する問題とそれを解決する方法には「標準化されていること」によって十分な同一性が保たれ、それゆえ解決者には専門家としての資格が与えられることになる。専門家がそのの直面している具体的問題に「適用」しているのは、まさにこの「標準化された知識 (standardized knowledge)」(Schon, 24/24) のことなのである。

「標準化された知識」の「適用」に関して重要なことは、第一に、「知の階層化」をもたらしている点である。「標準化された知識」すなわち「一般的な原理」こそが最も高次レベルの知であり、「具体的な問題解決」が最も低次レベルの知であるという、「知の階層モデル (hierarchical model)」が生じている点にある。(Schon, 24/24)

この「知の階層モデル」化過程の最初の段階においては、まず「実践の基盤となる学問や基礎科学」の基礎知識の知見があり、次の段階でこの知見を基礎として「日々の診断や問題解決の多くを導くことができる応用科学や技術学」がその役割を担い、最終段階で、「基礎知識や応用的な科学や技術を活用して、クライアントへのサービスを実際に行うための技能や態度」が現場で発揮され

ることになる。

第二に、「標準化された知識」の「適用」に関して重要なことは、この循環構造に組み込まれた専門家に「知の担い手の序列化」（ショーン自身はこの表現を用いていないが）がもたらされている点である。（Schon, 26-27/26-27）

この「知の階層モデル」化過程においては、確かに、現場で行き着いてそこで完結するのではなく、さらに「問題解決の技法」「サービスの提供」を実施したうえで、その成果を再び「基礎科学」へと還元するという一連の循環構造が一応は成立している。ただしその一連の循環構造中での実践者から研究者への方向性はあくまで対等な位置付けとは考えられていない。このようにして、「適用」の順序は同時に、知（知識）の由来もしくは依拠の順序という知の階層構造をもたらし、さらに「知の担い手の序列化」をももたらしめているのである。

この循環構造に組み込まれて、研究者には（制度的にも実践から分離され）、基礎科学と応用科学の知見を提供することが期待され、その一方で現場に臨む実践者には、「研究すべき問題と研究成果の有効性の検証結果を研究者に提供」（Schon, 26/27）し返すということが期待される。だがこうした相互交換関係を介するにしても、実践者にはあくまで研究から実践へとという一方向性のみが強調された枠組みの内部での役割が要求される。「技術的専門職の世界でも、労働の分割が理論志向と実践志向の間で仕事を分けるようになる。その結果、開業医よりも医学研究センターを働き場所として選ぶ人を見かけることになる。」（Schon, 26/27）

このようにして、この「適用」の順序は、「知の階層モデル」及び「知の担い手の序列化」と同時に、「専門分化（specialized occupations）」をももたらしめているのである。応用科学は基礎科学の基盤に依拠し、知識がより基礎的でかつ一般的であればあるほど、専門家には問題解決という目的に対する手段（標準化された知識）の厳密さが求められ、その厳密化に応じて学問や科学的知識もますます専門分化（標準化された知識の分化）されていき、それと相関的にその知識を産出する者の社会的地位も高いと見なされるようになる。（Schon, 22/21-22）

第三に、「標準化された知識」の「適用」に関して重要なことは、「技能や実

「実践知」の認識論的および方法論的軽視をもたらしている点である。

専門家養成を目指す（アメリカの）大学のカリキュラムについてこの事情が反映している。エドガー・シェイン（Edgar Schein）による次の見解、すなわち「カリキュラムの順次は、専門家の知識の構成要素が適用される順序に対応している。すなわち、まず第一に関連する基礎科学と応用科学、それから次に実践における現実世界の問題に適用される技能という順序がルールとなって続く。」（Schon, 27-28/27）という見解を受けて、ショーンは、この「技能（skill）」というシェインの用語法に、看過されえない重要な点が含まれていると主張する。

実質的な知識は、基礎科学と応用科学の理論と技術の中にあることになる。それゆえ、これらの学問がまず初めに来るべきものである。具体的な問題を解決するために理論と技術を使用する「技能」の方も、学生が関連科学を学んだ後に提供されるべきものである。なぜならば、それは、第一に応用的な知識を学ぶまでは応用的な技能を学ぶことはできないからであり、第二に技能は曖昧な二次的種類の知識（ambiguous, secondary knowledge）だからである。それらをそもそも「知識」とよぶことが混乱を招いている。」（Schon, 28/28）

以上が、哲学的方法論からみて、ショーンによって描かれた「技術的合理性」に基づく「標準化」の「適用」に際して生じる、帰結としての「知の階層化」「知の担い手の序列化」「実践知の軽視」の概略である。

### 第3章 「技術的合理性」の認識論の方法論的限界

ショーンによるアメリカの歴史的背景に関する叙述によれば、1970年代から1980年代に渉るアメリカ社会において、専門家の信頼及び権威の失墜が生じていた。なぜならば、「専門的知識は実践の場が変化するという性質にそぐ



わないし、その知識の複雑性、不安定さ、独自性、価値観の葛藤など、求められている実践の場において見られる現象にはますます適合しなくなっている」(Schon,13/13) からである。(Schon, 3-20/3-20)

第4章で述べるように、こうした「技術的合理性」の方法論的起源は「実証主義 (Positivism)」にあり、実証主義の持つ認識論の遺産を継承しそれに依拠している。本章でまず指摘すべき重要なことは、この実証主義的な実践の認識論は、専門家の前に立ちはだかる「厳密性か、適切性かというジレンマ」(Schon, 42/42) の解消を失敗に導く支配的なパラダイムであるという点にある。

実践の領域で生じる「厳密性か適切性か」(理論知か実践知か) というジレンマはいかにして生じるのか、ショーンは実践に関わる専門家が対処する2種類の適用領域に沿って、巧みな比喩を駆使しながら次のように説明している。(Schon, 42-45/42-45)

一つ目の適用領域とは、研究を基礎にした理論と技術とを効果的に活用できる、いわば地質の硬い「高地」である。二つ目の適用領域とは、技術的な解決が不可能なほどにまで乱雑な状況に陥っている、いわば泥濘の「低地」である。

ショーンによれば、「高地」領域の問題は、現場で働くクライアントや社会にとっては実はあまり重要ではない。だがそれにもかかわらず、実践の現場に「高地」領域に適った方法を選択する専門家は、専門職としての能力が発揮できないことに対する恐怖心から技術的な厳密性を渴望し、従って活動を狭い技術的実践に限定することを選ばざるを得ない窮地に追い込まれる。(Schon, 44-45/44-45)。

この種の専門家は、「低地」に潜む「あいまいな問題 (soft problems)」(Schon, 43/43) をあえて「高地」にこそ成立する「堅固な問題 (hard problems)」(Schon, 43/43) へと変換することによって、実際には合理的処理がうまくいっていないにもかかわらず、そのことに無自覚ですらある。その上さらに、合理的に適用できる専門知識を先行させ、それに適合できかぎりで実践領域の一部を強引に切り取ることに終始しているがために、不適切なデータは「ジャンク・カテゴリー (junk categories)」(Schon, 44/45) なる「がらくた」として切り捨てざるをえない。

一方、乱雑な状況に陥っている泥濘の「低地」領域の問題へとあえて向おうとしている別のタイプの専門家の方は、確かに重要な問題にきわめて適切に慎重にかかわってはいるが、だが「探究の方法を記述するように求められた時には、彼らは経験や、試行錯誤、直観について語り、難関をどう乗り越えてきたかを語る」(Schon, 43/43) だけに留まっており、「標準化」への理論的かつ一般的認識論的考察を欠いている。

確かに、ショーンによれば、専門職の研究者の中には、「高地」領域で実践の技術的熟達をめざすことの限界について考察し、専門家の持つ既存の知と現場の実践との間に谷間やギャップがあることに気づいて新たなアプローチを提案する者も確かに現れはした。だが、それは、あくまで「専門家の知識の科学的基礎と現実世界の実践の要求との間のギャップを技術的合理性のモデルを保持するやり方で埋めようとしている」(Schon, 47-48/48) にすぎないと、ショーンは断言すらする。

#### 第4章 「技術的合理性」の方法論的前提としての「実証主義」

重要なことは、ショーンによれば、専門職を悩ませてきたこうしたジレンマが「科学それ自体に負っていたのではなく、科学に対する実証主義者の見解に負っていた」(Schon, 48/49) 点にある。この科学に対する実証主義者の見解の特徴は、①「実践から研究を切り離すこと」、②「目的から手段を切り離すこと」、③「行為から知を切り離すこと」という「三種類の二分法」(Schon, 165/181) に支えられている点にある。哲学的方法論の観点から、実証主義の認識論の特徴を概観すればおよそ次のようなことが指摘されうる。

①「実践から研究を切り離すこと」については、たとえば、世界に関する実証主義的知識の唯一の源泉として二つの命題を取り上げている、20世紀の初頭のウィーン学派の理論において典型的に表明されている。

有意義な命題は、論理学や数学という分析的でかつ基本的に同義反復の命題か、世界についての知識を表現する経験的命題かの二種類のいずれかだと考えられた。前者の命題の真偽性は、その命題を否定すると自己矛盾が生じるという事実根拠が置かれ、後者の真偽性は、関連する経験的観察に根拠が置かれた。世界についての唯一意味ある陳述とは、経験的観察に基づく陳述だけであった。そして世界について不一致が生じて、原理的には、観察可能な事実を参照することによって解決するとされていた。(Schon, 32-33/33)

実証主義者たちは、経験的観察に基づく陳述が感覚的経験の要素にそのまま還元できるようなものではなく、経験的知識（経験的観察に基づく陳述）それ自体が理論を負荷されたものであることをも認識しており、経験的知識を基礎づける理論的必要性に気づいていた。それゆえ、「自然の法則を自然に内在する事実としてではなく、観察された現象を説明するために創り出された構築物だと見なすようになった。(Schon, 33/33)

科学は仮説 - 演繹的な体系となり、科学者はおのれの観察結果を説明するために、世界についての不可視の抽象的モデルを想定し、この仮説モデルを立証するために、競合する説明理論の中から正しい説明を選ぶべく決定的な実験を行うことをおのれの探究の中心に置いていた。実証主義の理論モデルからすると、実践的知識というものは確かに存在しはするが、それは実証主義のカテゴリーにきちんと当てはまるようなものでなく、実践はあくまで不可解で特異なものとして現れてくる。この不可解さや特異さに直面した専門家は、第3章で論じた、厳密性が適切性か（理論知か実践知か）というジレンマに遭遇することになる。

②「目的から手段を切り離すこと」については、実証主義の認識論的方法論的特徴として、実践的知識をあくまで目的に対する手段（道具）の関係にある知識として解釈する点が挙げられる。(Schon, 33/34-35)

目的について同意が得られさえすれば、あとはその目的達成のために最も適した手段（道具）は何かという問題に答えるだけでよい。原因と結果について

の科学的な理解が成立しているときには、因果関係は道具的關係へとすみやかに移行して、関連する科学理論を適用することで、或る目的に最もふさわしい手段を選択することができるようになる。

たとえば、医師は疾病について診断と処方することが、古いタイプの医師が備えていた職人のわざ（craft）と洗練された技法（artistry）に取って代われ、経験科学に基づき、目的に手段を確実に当てはめるような道具的实践の典型となった。

ここで、重要なことは、「技術的合理性」においては、特定の目的が関係者もしくは当事者間で同意されていることを前提にしそれに依存しているのに反して、それと対照的に目的が交錯し葛藤している場合には、解決すべき問題はまだ存在すらしていないという点である。ここでは、関係者たる当事者が達成すべき目的と、その目的達成が可能な手段の両方を構造化して明らかにするために、「問題状況に一定の枠組みを与える過程」こそがまずは専門家の実践にとって必須の課題となる。（Schon, 40/41）

この点は、われわれの哲学的方法論の観点からして、最も重要な意義を帯びてくる。専門家の実践があくまで問題解決の過程を有効に実行することに集中し、その問題解決過程と別個に切り離されて、問題の設定そのものもあらかじめ別個に与えられた既存のものとされてしまうならば、ここでも「目的から手段を切り離すこと」とする「技術的合理性」の方法論に制約されていることになる。

確かに何かを決定しなければならない問題が生じた場合には、すでにあらかじめ確立された既存の目的にとっての最適な手段を、利用可能なものの中から選択することによって解決される場合もあろう。しかし、この問題解決過程をいくらの確に遂行しようとしても、手段の選択、達成する目的、意思決定という問題設定過程そのものへと考察することは看過されてしまう。

現実世界の实践においては、問題は実践者にとって所与のものとして見出されているわけではない。現実世界は私たちを当惑させ、手を焼かせ、不確定であるような問題状況の素材の中から問題を構成しなければならない

い。問題状況を問題に移しかえるために、実践者はある一定の仕事をしなければならない。そのままでは意味をなさない不確かな状況に一定の意味を認識しなければならない。」(Schon, 40/40)

確かに、或る専門家にとって、この種の不確かな状況こそが実践にとって中心的な課題だとみなされ、「問題設定とは、注意を向ける事柄を名づけ(naming)、その事柄に注意を向ける状況に枠組みを与える(framing)ことを相互に行う一つの過程である。」(Schon, 40/41)となる。ここに、厳密性が適切性か(理論知か実践知か)というジレンマの解消ないし打開策が方法論的に示唆されている。

③「行為から知を切り離すこと」については、ショーンの方法論の独自な特徴とは、専門家の実践にとって問題設定そのものが課題となる状況に直面して、既存の科学概念に捕らわれることなく、初めから専門家が不確実性をよしとし、その不確実性と同種の探究技法を開示する過程としての科学的認識論を考察することもできるとする点にある。

問題解決にのみ専門知識が「適用」されるような専門家の実践のあり方を問い直し、不確実性を積極的に認め、それに巧みに対処するための問題設定に関わる探究の技法をあらたに開示し、別種の専門知識を求める実践の認識論へと向う必要性があると、ショーンは力強く主張したのである。この実践の認識論の要をなすのが、③「行為から知を切り離すこと」という二分法の方法論とは、別の方法論的出発点にほかならない「行為の中の省察」過程である。

## 第5章 「省察的实践者」を支える「行為の中の省察」の方法論的構造

本章では、「省察的实践者」が乱雑な不確実な現場に直面して、いかにして解決されるべき問題設定をしその問題を首尾よく解決へと至らしめるのか、その過程をショーンの叙述に沿って方法論的に考察する。(Schon, 49-75/50-72)

## 第1節 行為の中の知の生成

私たちは通常、日常生活上の行為を何らかの方法でよくわかっているかのよう  
に振舞っている。その「わかっていること」は適切に文章化することは大抵  
の場合かなりの困難が伴う。だが、確かに何らかの「知の生成 (knowing)」の  
暗黙の働き方が潜んでいることは間違いない。これと同様に、専門家の実践に  
おいても、「行為の中の知 (knowing-in-action)」(Schon, 50/51) といったもの  
が暗黙のうちに働き、専門家自身のおのれの実践の可否や適否もそれに依存し  
ている面が多々あるといえる。確かに、「行為する前に考えるということはある  
が、意識せずに熟練の実践を行う場合、そのほとんどにおいて先行する知的  
操作からは生まれないある種の知、知の生成の存在」(Schon, 51/51) といった  
ものがある。有能な実践家が合理的に識別して完全に記述することができない  
ような現象に対してもそれなりに的確に臨むことができるとすれば、それはこ  
うした「行為の中の知」がたとえ暗黙にではあれ、実際に有効に働いているか  
らにほかならない。

ショーンによれば、綱の渡り方のノウハウを身につけた綱渡り芸人、打者の  
弱点に向けて巧みに投球する大リーグの投手などの例に見られるように、こ  
うした通常の熟練した実践的知の様式としての「行為の中の知の生成」は次の  
ような特徴を持つ。(Shon, 54/55)

第一に、無意識的に実施の仕方がわかっている行為、認知、判断がある。当  
人たちは自分の行為に先立ってあるいはその行為の最中に、その行為、認知、  
判断について考えるには及ばない。

第二に、そのような行為、認知、判断を学習していることに当人は気がつか  
ないことが多い。ただし、それらを行っているという事実そのものには気がつ  
いている。

第三に、(道具を用いた技能修得の場合におけるように) 或る動作に伴った  
感触に気づいていたか否かにかかわらず、その感触内容が表す(暗黙)知の生  
成を記述することは通常はできない。

## 第2節 行為の中の省察

この「行為の中の知」に対しては、「省察的实践者」は、この行為の中に生まれている暗黙知を暗黙のままに留め置くのではなく、われわれが実践の中で具体的に行為し判断できるために、「行為の中の省察 (reflection in action)」(Shon, 55/55) の過程へと一歩進めることになる。というのも、実践家にとって最も肝心なことは、沼地たる現場に直面して、問題が解決可能なように的確な問題設定をし、実際にその解決を図ることなのだからである。実践者が不確実で不安定でそのうえ価値の葛藤をはらむような状況で対処する「技法 (the art)」の中心をなすものは、「行為のなかの省察」という過程全体なのである。(ショーンは、「行為のなかの省察」という表現を過程全体の総称としても用いている。)

重要なことは、佐藤学氏が指摘しているように、「行為の中の省察」過程全体は、第一に、(第4節で考察される)「状況との対話 (conversation with situation)」として遂行される思考のあり方には制限されないこと、第二に、実践の後に、状況の出来事の意味を振り返る「行為の後の省察 (reflection after action)」のみならず、実践中の行為そのものをも対象化して検討する「行為についての省察 (reflection on action)」をも含んでいる点にある。(佐藤, 10)

ショーンによる「行為の中の省察」の例示のなかで哲学的方法論からみて興味深いのは、言語表現レベルでの省察と言語を媒介にしないレベルでの省察という、二種の省察を取り上げている点にある。すなわち、「自分の型を見つける」という経験について大リーグの投手たちが語っている「行為の中にある暗黙のノウハウに関する一種の振り返り」という言語表現レベルでの例示のみならず、他のメンバーと即興演奏を巧みに演じるジャズ演奏家たちが集団として行っている、言葉を媒介しない相互「行為の中で (の) 省察」の例示が取り上げられている。(Shon, 54-55/56-57)

確かに、「行為の中の省察」の過程において、直観的で無意識的な行為が予想した結果しか生み出していない場合には、特に改めてそれについて考えようとは通常はしないものである。しかし、想定外の事態がもたらすような驚きの経験へとつながっている場合に、そこで始めて言葉を媒介とした省察が開始さ

れるとも解される。すなわち、ジャズ演奏家たちの行為は、「行為の中の省察」というよりもむしろ、言語化以前の熟達した「行為の中の知」の生成の典型例といえるのではないだろうか<sup>(1)</sup>。

### 第3節 実践の中の省察

「省察的実践者」は、「行為の中の省察」に留まることなく、「実践の中の省察 (reflection in praxis)」(Shon, 59/62) と呼ばれている問題解決を志向した省察過程へと一歩踏み出ることになる。その典型的な例示 (ショーンの取り上げている例示を一部改変) を医療者に即して明らかにすれば、次のようになる。(Shon, 64-65/66)

たとえば、或る眼科医によれば、患者のうちにかなり多くの人が書物に書かれてはいない問題を抱えて診察にやって来るという。症例の 80% から 85% において、患者の不平と徴候は、慣れ親しんだ診断や処置の範疇には入らない。優れた医者とは、これらの症例を理解する新たな方法をみずから探索し、自分の立てた新たな仮説を検証するために実験 (医学的実践や試行) を考案する者のことである。

様々な状況の中でも特に重要なケースとしては、患者が同時に二つ以上の疾病で苦しんでいる場合が挙げられる。各疾病からはお馴染みの思考や行為パターンが引き出されてくるが、それら疾病が併発することで尋常の処置では対処しがたい独特の症例へと変化する。その際にその眼科医は、緑内障を合併した炎症を伴ったかつての患者を思い起こした。その患者にあっては、緑内障への治療が炎症を悪化させ、また同時に炎症への処置が緑内障を悪化させていた。当の患者がやってきたとき、その眼科医は、患者に対する炎症への治療は不十分であっただけではなく、もう一方の緑内障をさらに悪化されるものであったと診断した。そこで眼科医は、あらゆる処置を一旦断念し、何が起きているかを診るためにしばらく待つことにした。その結果、患者の炎症の症状ははるかに減少した。のみならずその一方で、緑内障も消失した。実は緑内障の症状はその治療処置が作り出したものであることが判明した<sup>(2)</sup>。次に、眼科医は、そ



の患者に対して少量の薬を服用させることで、完全な恢復を狙わずに、病状を軽くして患者が仕事に復帰しやすいことをさしあたりの目的として目指した。

以上、ここには、さまざまな病態を示して治療困難に陥った患者に臨んで、完治ではないにせよ総合的によりよい状態を目指すことで、最後には治療に近づけた眼科医の問題解決過程を見て取ることができる<sup>(3)</sup>。

#### 第4節 「省察的实践者」の特徴

「省察的实践者」の特徴は、第一に、実践者が直面している状況に対して新しい理解を導入するとともに、状況そのものに「或る変化」を持ち込む実験（医学的探求や試行）を行っている点にある。その出発状況として、実践者は不確実で独自の状況の中に驚きや困惑や混乱を経験することを自らよしとしたうえで、自分の眼前に展開する現象について省察するだけでなく、自分の行為の中に暗黙のうちに潜んでいる、行為に先立つ過去の現象の把握についても省察を重ね、問題解決の過程を遂行していく。(Shon, 133-142/147-159)

ショーンは、「行為の中で省察するとき、その人は実践の文脈における研究者となる」(Shon, 68/70) という表現を用いて、「行為の中の省察」が技術的合理性の持つ二分法（理論知か実践知か、研究かその適用か）の制約を受けない、独自の科学的な探究方法の資格を有するものであると主張する。その際求められているのは、「良き変化」であり、ショーンによれば、それはジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill) の「基礎的な三つの実験方法」(Shon, 142/160) によって導かれる。

ここで、「良き変化」をもたらすように、いかにして問題設定をするのかその過程こそが哲学的方法論にとってとりわけ重要な論点である。「省察的实践者」が実践状況と「省察的な対話」の過程を経て、不確実で不安定でその上独自で価値の葛藤をはらむような実践状況に巧みに対応するとき、彼らは実践状況で「問題」を設定することができる。(Shon, 128-140/147-152)

ここでショーンがいう「省察的な対話」とは、問題設定の際に、実践者がクライアントだけではなく実践状況全体の変化へと働きかける過程を意味する。

実践者がみずからの実践を観察しながら、自らを批判的に問い直し、状況の中での自分の実践を振り返って判断することで、さらなる働きかけを行うというように反復されていく。

「省察的実践者」の特徴は、第二に、「行為の中で省察」する専門家はクライアントとの関係それ自体をも省察することができ、その結果クライアント自身が主体的に学ぶ学習者へと変化することができる点にある。(Shon, 157-164/174-180)

「実践の中の省察」の知は、専門職だけではなく、クライアントにも共有された知であるという人格と人格の間の相互行為における知である<sup>(4)</sup>。行為の中の省察の能力を広げるために、専門的な実践者たちが、職業生活に暗黙のうちに持ち込んでいる人格と人格の間の相互行為の理論(個人の考え方ではなく、たがいに共有されたプロフェッショナルのあり方に関する知)を明確に把握し、再構成することができなければならない。(Shon, 163-168/179-183)

柳沢昌一氏がショーンの『省察的実践とは何か』の特徴として、「ショーンの叙述は、省察的実践を、読者とともに、協同探究として進めようとする企てとなっている」(柳沢, 348)と指摘しているように、乱雑で混沌とした固有の状況に臨む医療者なり教育者なりにとって、「省察的実践者」は、「標準化」が「適用」しがたく、したがってマニュアル化が不向きな状況に臨んで、なおかつ一定の有効性を備えた態度を醸成するひとつの指針を与えてくれている。

## 註

- 1) 言葉を介さない暗黙の知の生成のレベルと、それを省察のレベルへともたらし際の言葉の媒介をどのように捉えているのか、ここでのショーンの叙述は言語の機能を巡って方法論的にあいまいさが残る。
- 2) ジル・ドゥルースは、『カントの批判哲学』の中で、「診断をカントの反省的判断力の一例」(Deleuze, 86/94)として取り上げている。
- 3) ただし、この例において暗黙の「行為の中の知」がどの過程でどのように働いているのか、また「実践の中の省察」が「行為の中の省察」過程全体のなかでどのような関係にあるのか、ショーンは直接言及してはいない。
- 4) ショーンのこの文脈での狙いとは別に、我々にとって重要な課題は、このクライア

ント自身が主体的に変容を引き起こすことに随伴的に、この主体的変容をあくまで間接的に促す専門家としての医療者のあり方の方法論的考察である。

## 結語として

最後に、以上のように「省察的实践家」について哲学的方法論の立場から概略的に考察してきた限りで、今後の課題（問い）について触れることが許されるならば、次の点を述べておきたい。

第一に、ショーンによる「省察的实践者」の方法論については、暗黙知と言語機能との関係等あいまいさが残る。この曖昧さは、ショーンによる事例説明や記述に捕らわれることなく、カントの反省的判断力の分析を活用してより判明にできるのではないか。

第二に、「省察的实践者」としての医療者なり教育者は、困難な状況に直面して、問題を解決して「良き変化」を状況にもたらすことに留まらず、その関心や問いの方向性は、実践過程そのものへの意味づけの問いや探求をも兼ね備えるべきではないか。

第三に、患者と医療者との相互関係がその効果に影響を及ぼしうる面が強いとされている現象については、ショーンの事例説明や記述に捕らわれることなく、別の事例に即して、たとえば「プラセボ反応」に即して、患者と医療者との相互変容過程全体を明らかにすることも、ショーンの狙いに沿った「省察的实践者」の有効な具体的遂行の一つではないか。

## 主な参考文献（引用したり直接言及した著作・論文のみ）

本文中の引用・参照に際しては、下記の〔 〕内の略記号と該当頁数を（ ）に明記した。なお、ショーンの *The Reflective Practitioner* に関しては、（原著のページ数 / 邦訳のページ数）の順に明記し、柳沢昌一・三輪健二訳をその

まま借用するか、もしくは一部文脈に応じて変更したことをお断りして置く。  
また、本書の部分訳である佐藤学・秋田喜代美 訳「専門家の知恵」も適宜参照させていただいたこともお断りして置く。

- ・ Donald A. Schon, *The Reflective Practitioner, How Professionals Think in Action*. A Member of Perseus Books Group 1983. [Schon]
- ・ ドナルト・A・ショーン 柳沢昌一・三輪健二 訳「省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考」鳳書房 2007年 [Schon]
- ・ ドナルト・ショーン 佐藤学・秋田喜代美 訳「専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える」ゆるみ出版 2001年 [佐藤]
- ・ 服部健二「臨床倫理学の教育方法と実際」シリーズ生命倫理学 19 医療倫理教育 丸善 2012 [服部]
- ・ 柳沢昌一「省察的实践と組織学習 D.A. ショーン『省察的实践とは何か』(1983)の論理構成とその背景」『教師教育研究 Vol.6 2013.6』福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 [柳沢]
- ・ 山口恒夫「師弟関係モデル」から「省察的实践家の育成モデル」へ —— 医学教育の転換 —— 医学教育 2007, 38 (3): 161 ~ 167 日本医学教育学会 [山口]
- ・ Gilles Deleuze, *La Philosophie critique de Kant*, P.U.F, 1962 (ジル・ドゥルーズ 中島盛夫訳『カントの批判哲学』法政大学出版会 1984年) [Deleuze]

## その他の参考文献

- ・ John Dewey, *How We Think*, D. C. HEATH & CO. PUBLISHERS, 1909.
- ・ Sue Thompson & Neil Thompson, *The Critically Reflective Practitioner*, Palgrave Macmillan, 2008.
- ・ 梶山委都子「看護における実践と研究 看護科学研究会の省察的实践」鳳書房, 2013.
- ・ サラ・バーンズ クリス・バルマン 編 田村由美 中田康夫 津田紀子 監訳「看護における反省的实践 専門的プラクティショナーの成長」ゆみる出版 2005年.
- ・ 金井壽宏 楠見孝 編 「実践知 エキスパートの知性」有斐閣 2012年.